

しろつばき
白椿
の
せい
精



登場人物

ナレーター

娘

むすめ

若者

わかもの

茶店の主人

ちやみせ

しゅじん

茶店の客

ちやみせ

きやく

旅人1

たびびと

旅人2

たびびと



1



2



3



4



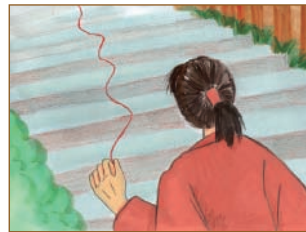
5



6



7



8



9



10



11



旅人 1

旅人 2

むかし海老名に伝わるお話です。

国分にあるお薬師様の境内に、大きな白椿の木がありました。
毎年白い花をたくさん咲かせ、それはそれは見事でした。

お薬師様の境内の下には、大山街道が通っていて、大山参りの旅人などでにぎわっていました。

白椿が咲くと街道を行く人たちは、

「いい香りがすると思ったら、この椿の木か」

「見事な花ですね」

と上を見上げ、思わずその美しさに足を止めて見とれていました。

椿の花が咲き出す季節に決まって日が暮れ始めると、お薬師様の門前にひとりの美しい娘が現れました。

黒髪をすっきり後ろにたらし、きめ細かな肌に薄いすずやかな着物を身につけ、何とも言えぬ良い香りをただよわせて、気品にあふれていました。

この娘が、どこの誰か知る人はいません。

茶店にたびたび立ち寄る人たちは、



客

茶店の主人

客

「今日は、あのべっぴんさんが来ているが、どこの娘さんかね」

「わしも知らんのだよ。この近くでは見かけないが誰か知らんかね」

「となり村の娘ではないのか」

と、みな口々に噂くちぐち うわさをしていました。

声をかけようにも何か近寄りちかよがたい気高けだかさがあり、ただ見とれてい
るばかりでした。

娘は茶店で一杯いっぱいのお茶を飲のんで休むだけでしたが、不思議ふしぎと娘が立
ち寄る店は榮さかえていくのでした。

しかし、白椿の花がみんな散ちってしまう頃ころになると、ばったり娘も来
なくなってしまうました。

客

茶店の主人

客

「今日も娘さん来んのかね」

「この頃ころとんと来んのだよ。病氣びょうきにでもなっていないければいいが」

「また顔出かおしてくれんかの。見ているだけで幸しあわせになれたのに」
と誰たれもが心配しんぱいしていました。

白椿の花が咲き出した春、あの美しい娘が茶店ちやてんに姿すがたを見せ始めはじま
した。



若者

もの好きな若者が、ある晩そおーつと後をつけましたが、お薬師様の石段の途中でパツと姿が消えてしまいました。

「あれ、さつきまで前を歩いていたのに…。」

おーい娘さん。おーい娘さん。どこに隠れたのかなあ…。」

とあたりをいくら探しても、どこにも見当たりません。

若者はあきらめきれず、何とかしてどこの娘かつきとめようと一晩考えた末、針に長い糸を通しておくことを思いつきました。

若者

「よし。うまくいくといいんだが：明日試してみよう」

次の日の夕暮れ、娘が現れると若者は思い切って娘に声をかけました。

若者

「あのう。きのうはどこに隠れたんですか。ずいぶん探しましたよ」と尋ねると、

娘

「ごめんなさい」と娘は困った顔をしました。

若者

「今夜は、家まで送らせてください」

娘

「近くですので、ひとりで帰れます。ありがとうございます」

と娘は、申し訳なさそうにことわるのでした。



そこで、若者はさりげなく娘の着物のたもとに針を通して、そしらぬ顔で別れました。

翌朝、その糸をたどってみると、糸はお薬師様の白椿の梢高く続き、針は一枚の花びらに突き刺さっていました。

若者は椿の木を見上げ、

若者

「もしや白椿の精なのかも。あんなことしなければよかった」

と心を痛め、茶店の主人に一部始終を話しました。

茶店の主人

「そうか、やはり娘さんは白椿の精であったか」

どうりでこの世の者でない美しさがあつたと、大評判になりましたが、それつきり娘は二度と姿を現すことはなかったそうです。

今も同じ場所に椿の木がありますが、この椿が伝説の椿か、あるいは子孫の木かは定かではありません。